わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―121―

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

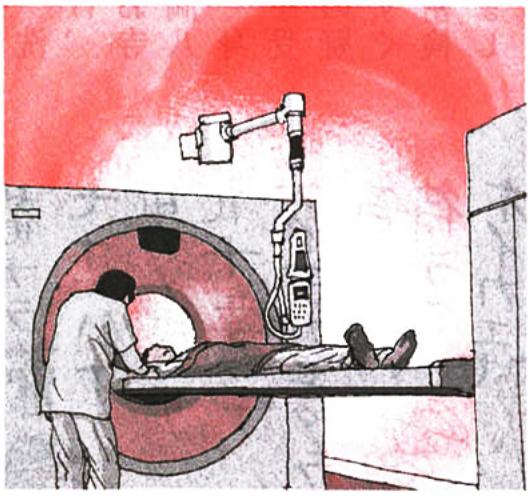
患者から見た医療の本質

病気知らずの健康体を求める国民の意識はいつの世も高く、そのぶん医療に対する期待は高じるいっぽうである。

病気になりたくない、死にたくない、老いたくない…いわば不老不死にあこがれ夢見る歴史上の人物たちと同じ願いを国民が持つようになってきた。そんな人々のニーズにこたえるように、医学はそれなりに進歩しほどほどの成果を挙げてきた。

最近では、患者の免疫力を高めてがん細胞を殺す「免疫療法」や「がんワクチン」、放射線より精度が勝れていると評判の「重粒子線治療」、抗がん剤に比べ副作用が少なくがん細胞だけを標的にする「分子標的薬」などなど、新しい治療や検査方法が登場すると、これでようやくがんが克服されるかのような華々しい報道が流れるのが常である。

しかし、である。最初素晴らしく見えた技術は、症例数が増えれば増えるほどその弱点と限界が明らかになってくる。少し前に騒がれたペット検査（当時、この検査によってあらゆるがんの発見が可能であるといわれた）もしかり。わざわざツアーを組んで、ペット検査を受けるために海外へ出向く人も結構存在した。もちろん、その方法論は画期的であり、何より患者の苦痛がない点は評価できるが、すべてのがんを発見できるというわけにはいかなかった。ペット検査では異常がなくても、従来の血液検査や内視鏡検査で見つかるがんの存在が目立つにつれ、ペット熱は徐々に冷めていったのだ。



がんは3人に1人がかかる国民病となった。血族にがんが多いと「がん家系」と恐れられたものだが、いまやそのようなことは関係なく、がんは誰もがなり得る病気として知られる。たまに講演などで、がんや心臓病や脳卒中で亡くなる人は全国民の60％以上に相当することや特に70歳を過ぎるとがんになる人は確実に増えること、などと話し、聴衆に向かって、さて皆さんはどの病気で死にたいと思いますかと問うと、ほとんどの人は答えを持たない。多くは困ったような怒ったような表情をして黙ってしまう。健康への関心は強くても、死の意識ははなはだ未成熟なのである。

それでもほぼ全員に共通する思いは「苦しまずに死にたい」ということだろう。痛みなく死ねれば、それほど長生きをしなくてもいいと口にする人が意外に多いのである。死への恐怖というよりもそこに至るまでの苦痛こそが怖いのだ。では、これまで医療はそんな思いに応えようとしてきただろうか。残念ながら答えは「ノー」である。病気に負けて死にゆくことは医療の敗北であり、認めてはいけないことだと教えられてきた。ゆえに、すでに手を尽くしようがなく死を待つだけの患者は治療の対象外として病院から出されてしまうのである。いわば医療は、またそれをつかさどるプロたちはおのずと治る可能性のある患者だけを選択してきたといえるだろう。

どんなに技術が進んでも、永遠の命を手に入れることは不可能である。一方現代の医学はひたすら病と闘う姿勢を崩そうとしない。ならば人生の最期をゆだねるのは医療ではなく、別のものなのだろう。それが何なのかは人それぞれであり、第三者によって形作られたり準備されたりするものではないのかもしれない。確かなことは、誰にとっても死は意外なほど近くにあるという事実とそこに科学は存在しない、ということだけである。

イラスト・伊藤栄章